

初代本因坊算砂（さんさ、1559～1623）初代碁所。

永祿二年京都長者町に生まれる。俗名は加納興三郎。八歳のときに日蓮宗寂光寺の開祖日淵に入門し、剃髪し日海と号す。宗祖の日蓮、日朗が碁を愛好していたことを知り、仏法修行の傍ら囲碁将棋に励み、「たちまち妙境に達し敵するものなきに至った」と座隠談叢にある。これを喜んだのが入洛していた織田信長であった。さっそく召抱えると、その枝をおおいに褒め称え、日海を常に「名人」と呼んだ。これが名人の起源といわれている。天正十年（1580）、日海は本能寺に逗留していた信長に請われ、鹿塩利玄と数局交える。その中の一局に三コウが現れた。退出してまもなく、関の聲が挙がり本能寺は火に包まれ



る。爾来3コウは不吉の前兆とされた。日海は寂光寺の塔頭のひとつ、本因坊に住んでおり、のちに本因坊算砂と名乗ることになる。「信長亡きあと、算砂は秀吉、家康に仕えることとなります。手合は二人とも五子といわれていました。性格がまったく違う三人の天下人に、嫌われることなく最後まで仕え上げたのは、算砂が抜群の器量人だったことと、世情をよく知る算砂は、彼らの良い話相手になっていたのでしょうかね」と福井正明棋士は語っている。

本能寺の変のあと、算砂は暫くの間寂光寺にこもり、信長の供養のためであろう、法華三昧に身を委ねていた。天正十一年（1583）八月、算砂は天下人となった豊臣秀吉に仕える事になる。囲碁将棋は武人にとって戦（いくさ）にも応用できる最適の技芸と理解する秀吉は、関白になった天正十三年に大競技会を開き、そこで優勝した算砂に、褒美として毎年米二十石等給する旨の朱印状を授けた。ちなみに算砂は将棋の達人でもあった。

二十七年後の慶長十七年（1612）徳川家康は囲碁将棋棋士に俸禄を給与し、世襲とした。この時算砂は50石五人扶持を賜ったが、後に天下統一を果たした家康から、終身三百石の扶持を受ける事になる。この職制官賜碁所の幕開けを記念して、囲碁諸将棋界とも2012年を専門棋士誕生400年の年とすることになった。「扶持を受けたのは全部で8人でしたが、将棋の宗桂も含めて、みな算砂の弟子のようなもの、技量人格抜群の算砂が束ねていました。扶持のことも、弟子たちが食えるようにと算砂が手配したと思われる。以来江戸、明治と囲碁の興隆が続いたのも、この下地があったからで、算砂の功績は大きく、算砂なければ、今の日本棋院もなかった。

元和九年（1623）本因坊家の開祖算砂は六十五歳の生涯を終えた。高弟の中村道碩に碁所をゆずり、見込みがなければ排除してもよしと、跡目の算悦のことを頼んだ。算砂の辞世が有名である。

「碁なりせば劫を打っても活くべきに、死ぬるばかりは手もなかりけり」

完